

1. 10代婦人の妊娠

自治医科大学医学部産科婦人科学教室 玉田 太朗
小山市民病院 石浜 淳美
弘前大学医学部産科婦人科学教室 片桐 清一

研究目的

10代婦人の妊娠の問題点として、以下の2つをとりあげて調査・研究した。

- (1) 10代妊娠が将来の母性に及ぼす悪影響をさけるためには、まず妊娠させないことが必要であるので、10代における避妊の実態を調査した。
- (2) 10代妊産婦の妊娠・分娩経過の異常を20代と比較し、また結婚の状態の影響を調べた。

研究方法

(1)については、アンケートを作製し、各県産婦人科医に送付、依頼、集計、分析した。

(2)については、主として青森県および山形県の産婦人科医の協力を得て、10代で分娩した婦人の家庭環境、家族歴・既往歴、妊娠分娩経過を調査した。

研究結果

(1) 10代妊娠の特徴

10代妊婦857名のアンケート結果をコンピューターに入力し、種々のクロス検定を行った。

10代婦人として未婚女性の妊娠は人工中絶に終ることが多い(今回の対象857名中595名, 69.4%)ことがわかった。

このような若い婦人中絶は精神的ならびに身体的に、その後の母性に対し悪影響を残す可能性が高いので妊娠しないように予防するための教育が必要である。

まず避妊を行ったか否かを調べたが、今迄に避妊を行ったことのあるもの18.4%、現在も実行中であるもの44.6%と比較的高い数値を示した。年齢別にこの実行率をみると、15才以下では30%前後、16~17才では50%、18~19才では60%をこえていた。

避妊を実行していたと答えた541例について、その方法を調べると、大半469例(86.5%)はコンドームを用いて避妊を行っていた。コンドーム以外の方法は、いずれも5%以下であった。

このように避妊に対する意識が比較的高いのに10回以内の性交で妊娠しているものが29.3%もある

のは、方法が拙いためと思われる。

実際このグループについて避妊法に限らず性教育を受けたことのあるものを調べてみると、全体の、54.9%にすぎなかった。ことに16才以下では性教育を受けたものは約1/3、17才以上でも約半数にすぎない。

性教育は、人格形成をふくめ幅広いものでなければならないが、このように無知のため妊娠し、中絶するというコースを取っている少女が多いことは、とりあえず具体的な避妊教育を行うことが早急に必要なであることを示すものである。

(2) 10代妊婦の周産期異常の特徴:

10代の分娩120例と同時期に分娩した20~24才の初産婦100例を対照群として、低体重児出生および妊娠中毒症の発現率を調べた。2,500g未満の低体重児出生率は10代群14.3%、対照群3%で10代群に明らかに高かった。また妊娠中毒症は10代群8.3%、対照群4%と10代群に高い傾向を示したのみならず、10代群では、とくに重症例が多く、2例の子癇も経験された。

さらに結婚状態、すなわち未婚、既婚別の異常発生率を調べるため、10代妊婦のうち、結婚の有無ならびに時期が明らかでない63例を、(A)結婚してから妊娠した群(19例)、(B)未婚のうちに妊娠したが、分娩時には入籍していた群(32例)および(C)未婚のまま分娩した群(12例)の3群に分け、低体重児出生と妊娠中毒症の頻度を調べると図1の如くであった。

これで見ると妊娠中毒症の発現率には差がないが、低体重児の出生率は未婚群に多いことが明らかである。

また妊婦検診の初診時期を20代の対照群—10代既婚群—未婚群の別に見ると、それぞれ受診者が50%をこえた時期が、図2に示すように、8週、16週、24週となっており、10代妊婦の初診時期が対照群にくらべ明らかにおそいことが示された。

妊婦検診受診回数を見ても未婚妊婦は約50%が5回以下と低い数値であった。

考 察

10代妊娠のいくつかの問題のうち今回は、避妊実行率、避妊法と性教育を受けた率に焦点をしばって分析した。性的発育や性行動の早傾化に対して、性教育の必要性が叫ばれて久しいが、教育担当者、方法論、システム（教育の場など）などが未解決であり実効をあげているとはいえないのが現状である。

本調査でも性教育を受けた率が低く、避妊の方法も、正規の教育以外からの情報によるものが多く、不正確であることが推測された。避妊教育には、詳細なヒトの生殖生理の説明と避妊法の具体的、技術的教育が必要と思われるが、その開始時期は、本調査の10代妊娠中、高校生が50%を占めている事実より考えて、おそくとも高校一年生では既にかなり詳細な知識を持っている必要がある。中学生は3.2%にすぎなかったが、これを防ぐためには、妊娠の危険性が高い群には中学生からすでに具体的な避妊教育を与えるべきであると考えられる。

10代妊産婦の産科的異常に関して、従来のわが国の報告は「管理さえ充分であれば20歳台の妊娠・分娩例と産科的には大きな差異がない」とするものが多かった。しかし従来の報告は少数例のものが多く、家庭環境や結婚の状態まで分析したものはほとんど無かった。

今回の調査では、20代既婚妊婦→10代既婚妊婦→10代未婚妊婦の順に周産期異常の発生頻度が上昇することが明らかになった。しかも未婚妊婦は既婚妊婦にくらべ妊婦検診受診開始および受診回数が明らかに劣っている。このことは、10代妊婦に対する妊婦管理の重要性を示唆するものではあるが、10代既婚妊婦と20代既婚妊婦とのあいだに差が出る原因については今後なお検討の必要がある。

今後の課題として、10代妊婦の何らかの未熟さが産科異常を起こす可能性があるかどうか追究して行きたい。

現代わが国では10代出産は年間13,000ほどで大した数ではない。しかし早晩この方面でも欧米化がすすむと覚悟しなければならず、しかも未婚の母やその児に対する社会的態勢がおくれているわが国では、大きな問題になる可能性が非常に大きい。たとえば、今回は集計途中なので発表に含めなかったが、10代未婚分娩で生れた児の養育をみても、社会的な施設へ収容されたものは16例中わずか2例で、結婚の見込みのない10例中6例が養子、4例が自分ひとりか母親とで育てるとなっている。この中には15才の少女で54才の会社の

上司の子を産み、ひとりで育てると答えたものがあった。実際の結末はまた追跡しなければならないが、幸な青春を送ることは程遠くに違いない。

今後の課題として、10代分娩の児の予後、若年中絶の後障害、さきへのべた10代産婦の未熟性など検討すべき問題が多く残されている。

要 約

10代婦人の妊娠を、(1)10代妊婦における避妊の実態およびそれに対する対策、(2)10代妊産婦の周産期異常の2点につき調査、研究した。

この結果、(1)10代妊婦では避妊に対する関心はあるが、教わったものはきわめて少なく、避妊失敗率が高いことがわかった。10代妊婦のうち50%は高校生、3%が中学生であることから、将来の母性の保護のため、おそくとも高校一年までに具体的な避妊の知識と技術を教育するべきである。

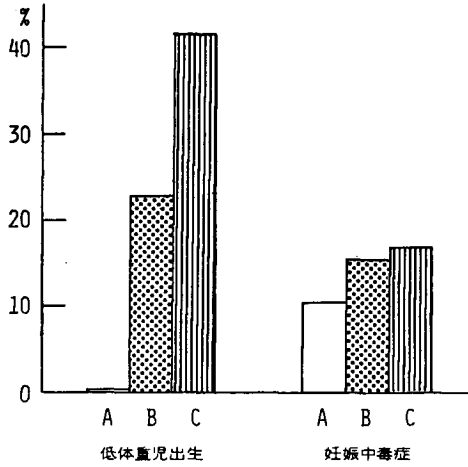
(2)10代妊産婦の周産期異常（妊娠中毒症と低体重児出生）は10代未婚→10代既婚→20代既婚の順に下がっていた。また10代未婚妊婦では妊婦検診受診回数が少なかった。これらは10代妊婦の管理の重要性を示唆するものである。10代既婚妊婦と20代既婚妊婦との間の差異については、管理の良・不良の関与も推定されたが身体的未熟性も否定できず、今後なお検討を続けたい。

文 献

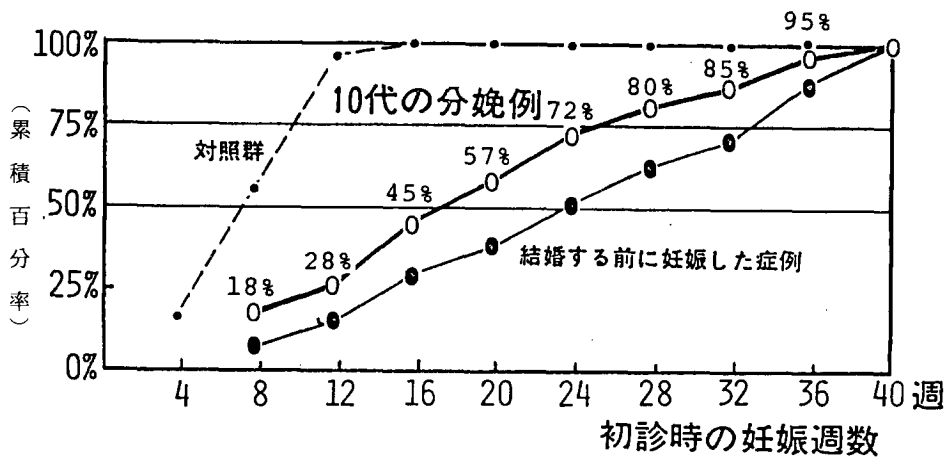
- 1) 片桐清一ほか、10代の未婚者妊娠 160 例についての検討。母性衛生 20:117 (1980)
- 2) 石浜淳美: 若年者の妊娠・分娩, 産婦人科の実際 28:351 (1979)

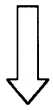
結婚の状態と周産期異常発生率

- A 群: 結婚してから妊娠 (19例)
- B 群: 未婚のうち妊娠・分娩までに入籍 (32例)
- C 群: 未婚 (12例)



初診時の妊娠週数





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

10代婦人の妊娠を、(1)10代妊婦における避妊の実態およびそれに対する対策、(2)10代妊産婦の周産期異常の2点につき調査、研究した。

この結果、(1)10代妊婦では避妊に対する関心はあるが、教わったものはきわめて少なく、避妊失敗率が高いことがわかった。10代妊婦のうち50%は高校生、3%が中学生であることから、将来の母性の保護のため、おそくとも高校一年までに具体的な避妊の知識と技術を教育するべきである。

(2)10代妊産婦の周産期異常(妊娠中毒症と低体重児出生)は10代未婚—10代既婚—20代既婚の順に下っていた。また10代未婚妊婦では妊婦検診受診回数が少なかった。これらは10代妊婦の管理の重要性を示唆するものである。10代既婚妊婦と20代既婚妊婦との間の差異については、管理の良・不良の関与も推定されたが身体的未熟性も否定できず、今後なお検討を続けたい。